

研究ノート

ホメオパシー否定報道にみる代替医療をめぐる諸論点

平野 直子

はじめに

2010年の8月、新聞各紙に「ホメオパシー」という耳慣れない単語が躍った。代替療法（ここでは「西洋近代的・科学的医療」以外の医療、としておく）の一つであるホメオパシーが、通常医療の忌避による死亡事件を引き起こしていることが発覚し、日本学術会議や関連する業界団体からことごとく効果を否定され、その医療現場からの排除が勧告された。この一連の流れは多くの新聞・雑誌で報道されたものの、そもそもホメオパシーがそれほど一般的ではないこともあり、なぜ学術会議がこれほど強い調子でこの代替医療に注意を促したのか、どこが問題の核心であったのかははっきりしないまま、東京都による立ち入り検査を境に報道は収束していった。

本稿では一連の報道の内容と展開を確認したうえで、ホメオパシーという療法の論理について解説する。日本学術会議の批判は、ホメオパシー自体の特徴に深く関わるものであるからだ。他方その批判は、「スピリチュアル」なセラピーから統合医療まで、「近代的」な知を相対化しその困難や抑圧的な側面を乗り越えようとする試みが陥りやすい落とし穴を示すものでもある。そこで本稿の後段では、ホメオパシーの普及がどのように患者死亡事件に繋がったのかを検討する。このことは同じ機能を期待されることが多い宗教や「スピリチュアリティ」にとって、無視できない問題といえるだろう。

1. ホメオパシー否定報道の概要

(1) 「ホメオパシー否定報道」の展開

一連のホメオパシー否定報道の発端となったのは、朝日新聞の8月5日の「ホメオパシー効くのか？」と題された記事である。その冒頭では、「ホメオパシー」という代替療法を利用している助産師が、頭蓋内出血を予防するビタミンK2シロップを投与しなかったせいで新生児が死亡したとして、2009年10月に提訴された事件が紹介されている。さらに記事は、助産師のなかにホメオパシーの利用が広がり、日本助産師会が調査に乗り出したことを伝えている。また識者の見解として、医師以外がホメオパシーを処方することを批判する医師（後述する川島朗）や、ホメオパシーの論理を非科学的と指摘する物理学者のコメントも掲載。ホメオパシーがさかんといわれる英国の議会で、2010年2月に「効能はない」と判断されたことも書かれ、全体としてホメオパシーに対する厳しい評価をはっきりと示す記事となっていた。

続いて8月11日に同紙は、ホメオパシー利用者が通常医療を忌避し、死に至ったとみられる複数の事例について報じた。たとえば5月には、43歳女性が「西洋医学」の受診を拒み続けた末に悪性リンパ腫で亡くなっていた。また生後6ヶ月男児の両親は、助産師に勧められてホメオパシー利用者になり、男児のアトピー性皮膚炎の治療や予防接種を拒否し続けた。男児は5月、5千グラムの低体重のまま亡くなった。このあと毎日新聞も「質問なるほど」コーナーでホメオパシーについて取り上げ、その論理とともに病気治療の効果には疑問があることを示している（毎日8/15）。

朝日新聞によってこれらの告発的報道がなされた2週間後、日本学術会議はホメオパシーについて、「荒唐無稽」「治療効果は明確に否定されている」「医療従事者が使えば患者を通常の医療から遠ざけかねず危険」との会長談話（科学的根拠が明らかで、学術会議で審議する必要のない案件について出される）を発表した。朝日新聞の報道を受けての談話発表のように見えるが、唐木英明・日本学術会議副会長によれば、日本学術会議はこの1年半ほど前から、医療機関でのホメオパシー利用を問題視し議論を進めていたという。2010年に入って通常医療忌避による死亡事件が続いたことなどを受けて、会長談話が出されることになった（朝日 8/25）。談話が出されたことは、読売・毎日・産経・日経などの各紙でも報じられ、ホメオパシーという単語はメディア上に一気に拡散していった。

25日には日本医師会と日本医学会が共同会見を開き、「ホメオパシーが新興宗教のように広がった場合、非常に多くの問題が生じるという危機感を持っている」との見解と、学術会議の会長談話への全面的支持を表明。また治療にホメオパシーを使わないよう会員に周知することも示唆した（朝日 8/26 ほか）。26日には長妻昭厚生労働大臣が、ホメオパシーを含む代替医療についての調査を始める方針を示した（産経 8/26 ほか）。同日、日本助産師会も、会員に対しホメオパシーを用いないよう徹底する表明し、また使用実態調査を始めたことを発表した（毎日 8/27 ほか）。日本薬剤師会も、医療従事者は「医薬品類似物」を医療現場で用いることは厳に慎むべきとのコメントを出した（赤旗 8/27）。

朝日新聞の追及は続き、9月2日には沖縄県名護市の公立学校養護教諭が、保健室に来る子どもたちにホメオパシーの薬（「レメディ」）を渡していたことを報道。この教諭は養護教諭向けにホメオパシーの講演も開いていた。

9月8日には東京都が、ホメオパシー薬販売会社「ホメオパシージャパン」に、薬事法に基づく立ち入り調査を行った。薬事法は、健康食品の宣伝に病気が「治る」など薬効を示す表現を使うことを禁じているが、同社はホームページやパンフレットで、「レメディ」は皮膚病やむくみなど特定の病気に効果があると謳っていた（読売 9/9）。

(2) 否定報道への反応

ホメオパシーをめぐる議論の一部は、他の代替医療や健康食品全体へも発展していった。読売新聞の8月28日「代替医療 見極め慎重に」で医療人類学の上田紀行は、通常の医療の問題点として、医者と患者のコミュニケーションが希薄であること、アレルギーやリウマチなど慢性の疾患や症状に限られた対応しかできないことなどを挙げ、代替医療にはこれを補う役割が期待されると説明する。補完代替医療学の鈴木信孝も、代替医療と西洋医学が相補うことの必要性を主張しつつ、使用時には医師によく相談すること、不自然に高額なものは疑ってみることなど、利用する際の注意点を示している。毎日新聞8月30日の「メディア時評」（京都産業大教授・永田和宏）は「大事にしたい科学的根拠」という題で、ホメオパシーのほか美容に良いとされて売られているコラーゲン含有食品を例に出し、どちらも科学的根拠はないと指摘。美容や健康に関する広告や記事のいい加減さに注意をうながしている。

学術団体や医療関係者団体から、行政関係者までが軒並みホメオパシーを全否定するという四面楚歌のなかで、西洋医学とその他の代替医療の統合を目指す日本統合医療学会は、「学術会議の談話は実態と異なっている」として公開討論会を開催することを呼びかけた。問題を起こしたのは一部の団体で、ホメオパシー自体は海外でも研究の対象となっており、有効性が

検証されたという報告も多くあるというのである（朝日 8/28）。しかし本稿が執筆されている11月半ばの時点では、討論会が行われるという報告はないようだ。

2. ホメオパシーの論理

(1) ホメオパシーの治癒の論理

一連の議論のなかで、ホメオパシーが受けた批判の要点は2つある。一つは単純に、ホメオパシーが病気に「効く」という主張は間違いであるということだ。ホメオパシーの病気治しの論理は荒唐無稽で、治療の効果も科学的手続きを踏んだ検証により否定されていると学術会議は主張する。批判のもう一つの要点は、ホメオパシーが近代医療の受診忌避をひきおこし、最悪のケースでは利用者の命に危険が生じるということである。前者はとくに、ホメオパシーが拠って立つ病気治しの「論理」に深く関係している。そこで本節ではまず、筆者がこれまでホメオパシー利用者の書籍や講演などから得たホメオパシーの基本的な論理をまとめよう。この点を検討してみよう。

ホメオパシーの根本原則は「同種（類似）の法則」、つまり「病気を治すためには、その症状と似た状態をつくりだす物質を摂取するのがよい」ということである。たとえば発熱を抑えるためには、発熱を起こさせる植物ベラドンナのレメディが効果的とされる。不眠症の治療には、眠りを妨げるコーヒーのレメディがよいとされる。

患者が苦しんでいる当の症状を抑えず、むしろ助長しようというのは奇妙な考え方に思われるが、ここで重要なのは「自然治癒力」という概念である。人間の心身はもともと病気の治し方を知っており、健康が損なわれると自然にそれを治そうとする。このとき身体が起こす反応が、病気の「症状」なのだということである。したがって、身体が悪いところを治そうとして起こす反応を抑えては、根本的な健康を取り戻すことができない。むしろレメディを用いて症状の現われを適切にコントロールしてやることで、本質的な健康を獲得しようということである。

こうした考え方から、ホメオパシーの診療では最初の間診に非常に長い時間をかける。病因の在り処を特定してそれを取り除くのではなく、症状と患者自身を徹底的に観察することが、そこにどのような「意味」があるのかを読み解き、うまくコントロールするために必要だからだ。患者自身については、生まれてから今までの経歴、家族との関係、生活習慣、病歴などを聞き取り、受け答えから性格も判断する。症状についてもいつから、どのくらい、どのように、どういう状況で……など徹に入り細にわたる。このような「患者自身を診る」「患者の訴え（症状）を何より重視する」という姿勢こそ、要素還元主義に陥りがちな近代的医療が失っているもので、ホメオパシーの大きな強みであると、利用者たちはしばしば自負する。

あらゆる性質の人々のあらゆる症状に対応するため、ホメオパシーのレメディの種類は数千にのぼる。どんなレメディがあるかは、ホメオパシーの聖典というべき『マテリア・メディカ』に記載されている。レメディの原料として、植物・動物・鉱物など自然界にあるさまざまな物質が使われる。このように、化学合成されておらず「自然な原料」を使っていることが、「自然＝優しさ」という図式を持つ人々に大いに喜ばれた点なのだが、これについては後で検討しよう。問題は原料が「自然」であろうとなかろうと、正しくホメオパシーの論理に基づいて作られたレメディであれば、そこに「原料」とされるものの成分は含まれていない——効果が高いとされるものであればあるほど、確実に含まれていない——ということだ。

そのように言っている理由は、ホメオパシーのもう一つの基本原理にある。ホメオパシー創始者

のハーネマンの述べるところでは、レメディは「希釈」すればするほど効果が高くなるというのである。「原料」の成分が入った溶液を水で100倍に希釈し、できた液体をまた水で100倍に希釈し……というプロセスを経てレメディは作られる。よく用いられるものでは数十回の希釈を経ており、そこにはもはや、もとの「原料」の成分はほとんど一分子も入っていない。しかしその「効力」（「ポテンシー」と呼ばれる）は逆にどんどん強まり、患者に与える作用は大きくなっていくという。

レメディがこのように作られている以上、ホメオパシーが病気に効果があるとするなら、「効力」を発しているのは物理的な「原料」の成分ではあり得ないことになる。では何が病気を癒やすのか。このメカニズムについては利用者たち自身も、完全に解明されていないことを認めている。ただ創始者のハーネマンが、レメディは希釈するだけでなく「激しく振ること」（これを「振盪（しんとう）」と呼ぶ）で効力が出るとしていることが、一つの手がかりとなる。「振盪」が、現在の科学ではまだ知られていない何らかの作用を発生させた結果、「原料」が存在した痕跡が水に残るのではないかなどと説明されるのである。推進者たちはこれを「水が記憶する」と表現したり、水にエネルギーもしくは情報が移るといったりする。

とはいえ、「希釈」の原理を知ったうえで素直に考えるなら、「レメディはただの水である」ということになるだろう。このようなある意味のわかりやすさと、効果の検証のしやすさ（問診とレメディ処方为主体のホメオパシーはダブル・ブラインド・テストが可能だが、鍼灸や指圧・各種の整体のような熟達した施術者が必要な療法だと、厳密な検証はずっと難しい）のために、ホメオパシーは疑似科学の検証を目的とした書籍やウェブサイトで、必ず最初かそれに近い位置で登場する、いわば疑似科学の代名詞となっている。日本学術会議が談話で「荒唐無稽」という強い表現まですることができたのも、ホメオパシーの論理が持つこのような特徴が背景にあると考えられるだろう。

(2) ホメオパシーの「神話」と治癒経験の共同体

ホメオパシーを利用する人がみな、上述のような論理を知って使っているとは限らない。今回のように助産師などの専門家から勧められた場合、何も知らずただ「良いものらしい」と服用することもあるだろう。一方ホメオパシーを推進している人々は、レメディに「原料」の物理的な成分が残っていないことを確かによく知っている。レメディは小さな蔗糖の粒に吹き付けられて処方されることが多い（だからレメディはしばしば「砂糖玉」と表現される）が、その食品成分表示にはただこの蔗糖のみが記載されている（朝日新聞8月5日の写真では「テンサイ糖」となっている）。それでも彼らは、そのレメディを処方することが、患者の身体に影響を与えると「信じて」いる。

ホメオパシーの効果を信じるということには2つの側面がある。一つは創始者ハーネマンの、「類似の法則」や「希釈・振盪」の発見の物語を信じることであり、もう一つは本人もしくは身近な人の「ホメオパシーによって治った」という経験を信じることだ。特にハーネマンの発見の物語は、ホメオパシーの利用者にとっては治癒の論理の源であり、経験を意味づけするためのひな形を提供してくれる「神話」といえるだろう。

ハーネマンは18世紀から19世紀にかけて活動したドイツの医師である。当時のヨーロッパは近代医学の黎明期であったが、新しく発見されたさまざまな事実はまだほとんど治療には結びついていなかった。心身についての見方が急激に変化する一方で、瀉血などの中世以来の治療がまだ行われ、医者は病気を治すよりむしろ悪化させることが多々あった。

ハーネマンは医師としてこうした医療のあり方を憂え、自らは開業をせずに医学の研究を行っていた。ある日、マラリアに効くといわれているキナの樹皮の作用を調べるために自分で服用してみたところ、マラリアと同じ症状が出た。この経験からハーネマンは「同種の法則」を発展させていった。

しかしこれらの物質をそのまま摂取したのでは、効果はあっても副作用が大きい。そこでこれらの物質を薄めて投与してみたところ、より強い効力を示したうえ、副作用もなかった。この経験から、彼は「希釈すればするほど効力が強まる」という法則を考案する。またある日、ハーネマンは馬車に揺られたホメオパシー薬のほうが、家に置いておいたものより効力が強まっていることを発見した。これにより、「希釈と振盪」というレメディの基本理論が出来上がった。ハーネマンは、当時としては高い確率で人々の病を治すことができるようになり、この療法を選択する人も増えていったといわれている。

以上がハーネマンのホメオパシー発見の物語である。実は、「類似の法則」や「希釈」「振盪」という方法が有効だという根拠は、突き詰めるとこのハーネマンの「経験」にすべて帰着する。その上にホメオパシーの利用者たちが、希釈振盪されたレメディがたしかに「効いた」ということを追体験し、この理論を支持・肯定する。ホメオパシーの推進者は自らレメディを服用して、自分に起こった変化を記録し、新たなレメディを開発する。そしてそれが『マテリア・メディカ』などに掲載されていく。こうした一群の主観的経験の集積が、ホメオパシーの世界を支えている。

ホメオパシー推進派が、これらの「治癒の物語」をホメオパシーが間違いなく効果があることの証拠として掲げる一方、否定派はそこで語られる「回復」の経験が、ホメオパシーの効果の証明ではなく偽薬効果（プラセボ効果）の表れだと指摘する。プラセボ効果とは、薬効のないものを投与されても、「投薬を受けた」という事実自体が患者の意識を変え、実際に身体の状態にも影響を与えて症状を軽快させてしまうという事態を指す。ホメオパシーのレメディは本当にある程度の「効力」があるのか、あるいは「効力」と見えるものはただのプラセボ効果なのか、「客観的証拠」を得るためにさまざまな臨床試験が行われてきた。現在のところ、ホメオパシーがプラセボ効果を超えた作用を及ぼすという明白な結果を示した研究はないとされている（ホメオパシー利用側が「効果を実証している」としてあげた検証実験は、手続きなどの信頼性が薄いとされる）。

しかし否定派がホメオパシーの効果が「存在しない」ことを、厳密な手続きによる「客観的な証拠」によって証明したとしても、それが「治った」という個別具体的な経験以上に利用者たちの「現実」を構成することはないようだ。ホメオパシーによって「治った」症例（それがプラセボ効果であれ）を多く見てきた推進者たちは、今回の学術会議の談話に対して「きちんと調査していない」（朝日 8/25）「通常医療が効かず、代替療法を必要とする患者から選択肢を奪う」（女性自身 9/21）と反論している。

個々人が実際に「経験」したと感じ、「現実」と見なして人生に組み込んでいることを、他者が否定して「客観的な現実」に置き換えるよう要求することはできるだろうか。これと同じ構造の問題は宗教をめぐるでも起こるが、代替医療は直接人間の身体に関わることであるため、ある「現実」の構成の仕方（たとえば「ホメオパシーには通常医療を超える効果がある」などの信念を持つこと）が不可逆的な災厄（通常医療忌避によって死者が出るなど）につながるということが起こりやすい。主観的な経験を重視して客観的にはリスクの高い行動を取る人に対し、他者が強制的にその行為選択を禁じることは認められるのか。これは宗教的な病気治しを含む代替医療が抱え

る、難問の一つである。

ただ今回の件に関して言えば、上のような困難がありながら朝日新聞が告発的報道に踏み切ったのは、「助産師（という医療のプロ）が職務上の権威を背景に、十分な情報を与えることなく母親や子どもにホメオパシーを利用させている」恐れがあり、また「（ホメオパシー服用を自分で選ぶことができない）新生児が被害者となって訴訟が起きている」という事実があったからだろう。これは上のような医療をめぐる自己選択・自己責任を完全に認めたとしても逸脱的なケースであり、学術会議の談話がなくともいずれ糾弾される状況だったといえる。

3. ホメオパシー「受容」の背景と医療忌避

(1) 代替医療と「癒やし」への期待

学術会議の批判の要点の一つ「荒唐無稽さ」は、上のようなホメオパシーの論理をさして言われたことであった。ではもう一つの「通常医療の忌避」には、どのような事情が反映しているのだろうか。これについてはRIRCデータベースで今回の一連の報道以前にホメオパシーが登場した新聞・雑誌記事を収集し、その文脈を見ていくことで手がかりが得られる。

RIRCデータベースにおいて2010年8月5日以前にホメオパシーが登場した記事は、82件と多くはない。そのうち2001年以降の74件の記事は、ほとんどが代替医療をテーマにしたものであり、紹介されたさまざまな療法のなかにホメオパシーが入っているというのが、共通のパターンである。ライフスタイル誌『ソトコト』2006年6月号の以下の記述は、この時期メディア上で代替医療がどのように描かれていたかを端的に表している。

世界の風潮は代替医療も含めた多様な方法による医療へと向かっている。西洋医学の限界もはっきりしてきている。科学が進んできた結果、科学万能の信仰めいたもの問題点もわかってきた。客観的な証拠がなければならぬ、とやってきた医療の世界だが、それぞれの人が持つストーリーの中でしか癒せないものがある。それは心の問題でもあるが、体の問題でもある。そうしたことがわかってきたのだ。（『楽しい代替医療』『ソトコト』2006年6月号198頁）

前節で「ホメオパシーの特徴」と呼んだものがそっくり繰り返されたような文章であるが、この記事にはホメオパシーとともに、「ロルフイング」「断食療法」「マクロビオティック」「ヨガ」「オステオパシー」「アーユルヴェーダ」「気功」「アロマセラピー」「森林セラピー」「免疫療法」「薬草療法」「呼吸法」ほか諸々の健康器具が登場する。これらの共通点と言えるのは「近代科学(医学)に基づかない」「身体によい(とされる)」という点くらいである。ホメオパシーの浸透は独立した出来事ではなく、上のような事物がいっしょくたに支持されるような、代替医療をめぐる言説の大きな流れのなかにあった。

この記事でインタビューを受けている川嶋朗・東京女子医大助教授は、アメリカ・イギリスで代替医療を学び、その日本での普及に精力的に取り組む医師である。彼は患者が主体的に参加し、選択する新しい医療を目指しており、その選択肢の一つとしてホメオパシーを高く評価している。彼はこの時期の代替医療をめぐる記事の多くで発言を行っている。

ホメオパシーをメディアで取り上げたもう一人の重要人物は、「ホリスティック医療」を掲げ帯津三敬病院で末期ガン患者らの治療に取り組む、帯津良一医師である。「ホリスティック医療」

は帯津医師が提唱したもので、「ボディー（身体）、マインド（心）、スピリット（精神）の人間まるごとをみる医学」（「エビデンスと直感（上）」東京新聞2006年5月9日）とされる。この観点から彼はホメオパシーを非常に高く評価しており、2001年から2010年8月5日までにホメオパシーが登場した74件の記事のうち、実に21件に帯津医師が関わっている。

ホメオパシーは、希釈することでその薬の物質性を徹底的に排除して、薬の持っている靈魂、つまり命のエネルギーだけを用いるという考え方なんですね。この発想を専門家から聞いた時、ホリスティック医療そのものだ、ぜひやろうと思いました。

（「21世紀のガン治療のキーワードは「自然治癒力」です。」『駱駝』2006年8月号138頁）

彼らは近代医療の問題点——専門分化し要素還元的になってしまって患者の心身全体を診ることができず、慢性疾患や末期がんの患者の苦しみにも応えられないこと、また患者が医師任せになって、主体的に自分の病気に立ち向かおうとしないことなど——を真摯に受け止め、ホメオパシーやアロマセラピー・気功といった代替医療にたどり着いた。メディアにおけるホメオパシーの登場回数という点では、彼らの影響はとても大きい。

しかし実際のホメオパシーの利用者拡大の背景にはもっと大きな文脈、つまり「スピリチュアルブーム」とも呼ばれた「癒やし」「自然」ブームの存在があると考えられる。冒頭の朝日新聞報道では、ホメオパシーが「食品添加物や農薬などを避けようという「自然派」志向の女性らの間で広がっている」とある（朝日8/25）。たしかに2010年8月5日以前のホメオパシーが登場する記事の中には、オーガニック食品を利用しながらホメオパシーや風水・ヨガなどを取り入れた生活をするアメリカ「自然派」生活を紹介する記事（「ビオ・カリフォルニア」『AERA』2005年5月2日号66-69頁）や、以下の『ELLE JAPON』2007年1月号「スピリチュアルサロン」特集のような記事がある。

最近では、エステで美を磨くのと同じ感覚でスピリチュアルなサロンに通い、心身にパワーをチャージする人が急増中。気分転換したいときにぴったりのスポットを厳選して紹介します。……

日本ではまだあまり知られていないキネシオロジーという手法で内面を探っていくのがこちら。最初にカウンセリングをじっくり行ってから、さまざまな言葉やサインに対して筋肉がどう反射するかをテストしていく。……そうしてその人が抱えている問題の原因を突き止めて、改善していくための目標を設定。音叉療法やホメオパシーといったセラピーのなかから最適なものを選んでいく。自分の内側に隠れている問題と向き合ってみたい人は、試してみてもいい。

（「噂のスピリチュアルサロンへ！」『ELLE JAPON』2007年1月号158-159頁）

帯津・川島両医師の発言と、「自然派」もしくは「スピリチュアル」ブームのなかの記事は、強調点も目的も大きく違うが、「近代的なもの（医学や科学や食品）」が人体に対して攻撃的かつストレスフルで、われわれの心身を痛めている」という言説は共通している。2000年代を通じて、こうした「近代的／科学的＝不自然＝攻撃的・心身を害する、非近代的／近代科学の産物ではない＝自然＝優しい・身体にいい・気持ちいい」という二項対立図式はメディア上に繰り返して登場しており、すっかりおなじみのものになってきていたとみられる。

(2) 「近代の毒」と「優しい自然」

ホメオパシーを使った医療を推進していた帯津医師と川島医師だが、両者はともに代替医療を医師の監督下以外で行うことには否定的である。『Voice』2006年12月号のインタビューで、川島医師は以下のように注意を促している。

CAM（筆者注・「補完・代替医療」complementary and alternative medicine）を使ってできるだけ自分の体に危険のない方向で予防するというのは、それ自体はとても人に優しいあり方だと思います。しかしじつは、「人に優しい」というイメージの裏で、危険な状況も横行しています。先ほどのホメオパシーを例に挙げますと、医学を知らない民間の方が勝手に教育をして、医学知識をもたずにホメオパシーの知識だけで患者を診るといったことが起きています。……ホメオパシーでは、アグラベーションと呼ばれる好転反応が起こります。これがほんとうの好転反応なのか、たんなる病気の悪化なのかどうかの見分けがつかなかったために、悲惨な目に遭われた患者さんが現にいらっやいます。こうした状況を放置すれば、非常に良い治療であるホメオパシーも危険なものとして日本から排除されかねません。

ホメオパシーを例に出しましたが、日本では他のCAMにも似たような状況が当てはまります。自分の治療が最高だと信じ込んで、「わたしが治すから、西洋医学を捨てなさい」といった宗教がかかったことをおっしゃる人がまだまだ多い。わたしはCAMを推進する立場にありますが、同時に危険性も訴えなければならぬと思っています。

（「サプリメントの安全性を疑え！」『Voice』2006年12月号33頁）

2010年8月に朝日新聞が告発したのは、この懸念を超えた事態だった。ホメオパシーは「医師ではない医療関係者」のなかに浸透し、その結果乳児の死亡例が出るという事態にまで至った。背景には前項のように、「近代的／科学的＝攻撃的、非近代的／科学の産物ではない＝優しい」の二項対立図式が馴染み深いものになっていたことがあるだろう。これがしばしば発展して、「近代的／科学的＝悪（毒）、非近代的／科学の産物ではない＝善」という善悪二元論に近いものになってしまう。

この善悪二元論に基づけば、症状の悪化さえ「善」と解釈されることになる。「アグラベーション」をめぐる認識はその典型である。推進者はホメオパシーを服用しはじめると一時的に体調が悪くなるとし、これを「アグラベーション」と呼んでいる（代替療法一般でよく使われる「好転反応」と同一視されている）。この症状の悪化は、これまで近代医療の薬品などで抑えていた本当の問題点が出てきたものであり、ホメオパシーが効いていることを示す「良い兆候」と解釈される。ただしそれが「アグラベーション」なのか病気の悪化なのかは、「専門家」にしか判断できない。こうした「近代科学的＝悪、非近代科学的＝善」の図式、とりわけ前者を強調することが、通常医療忌避につながりやすいのである。実はホメオパシーを推進するさまざまな団体のなかで、今回助産師会や養護教諭団体への浸透をはかったと報道されたり、ホームページにレメディの「効能」を謳って立ち入り検査を受けたりしたのは、「ホメオパシー医学協会」というただひとつの団体（とその関連企業や個人）なのである（朝日 8/11、8/25、9/2、9/8）。同協会是由井寅子会長の非常に強い影響下にあり、広報誌には彼女の著作の宣伝が並び、ホームページでは彼女の精力的な活動が大きく報告されている。その各所に、「予防接種は有害である」など、上記

の善悪二元論を強めるような言及が見られる。

近代医療の良さも認めながら共存しようというホメオパシー利用者は、こうした強い善悪二元論者と彼らが一緒に扱われることを嫌う。学会会議談話にも「代替医療をひと括りにして否定している」と苦言を呈する。しかし「近代（科学）的＝攻撃的、非近代（科学）的＝優しい」の穏当な二元論から、強い善悪二元論への移行はそれほど大きな飛躍ではない。「近代の毒」と「優しい自然」の言説のなかに代替医療がある限り、善悪二元論と通常医療忌避につながる恐れは避けられないと考えられる。

おわりに

川島医師や帯津医師が問題提起したように、近代的な医療や心身観を見直すことは患者の利益になることがある。病気にならないまでも日常生活で抱え込んでしまったストレスを、さまざまなセラピーで解消することもできるだろう。いかに「荒唐無稽」に見えても、それで「癒やされた」「良くなった」ということが個々人に「現実」として「経験」されていれば、それはかけがえのない個人の生の一部である。他者が実在を否定することは難しく、それに基づく信念や選択をやめさせるのはもっと難しい。

ただし代替医療においては、ある経験や知識を「現実」とすることで、その人の心身を害したり、最悪の場合死に至らしめたりすることがある。またその代替医療に関する情報が不十分にしか与えられていない場合や、患者が自己決定能力の低い子どもである場合は、自己責任原則を単純に適用できない。今回のホメオパシー否定報道で、メディアや学術団体が声を挙げたのはこの点を踏まえてのことであつたと考えられる。

またホメオパシーが浸透していく背景にあつた、「近代（科学）的であることを見直す」機運は、医療だけにとどまらず、社会・経済・教育ほかさまざまな分野でも見られることである。そうした機運のなかでは、長い伝統と独自の価値体系を持つ宗教が果たす役割にも期待がかかっている。しかしそこには、代替医療における問題と同じように、問題を「近代科学的＝悪、非近代科学的＝善」の二元論にすり替え、人々の選択をミスリードする危険が潜んではいないだろうか。「見直し」はたいいていの場合、よりよい生を目指す真摯な心から提唱される。それを実際により結果に結びつけるためには、こうしたミスリードを防ぐ細心の注意が必要だろう。